

八甲田山死の彷徨

新田次郎



新潮文庫

はつこう ださん し ほうこう
八甲田山死の彷徨

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 122 N

昭和五十三年一月三十日発行
昭和五十三年三月十六日五刷

著者 新田次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

八甲田山死の彷徨

新 田 次 郎 著



新 潮 社 版

2451

八
甲
田
山
死
の
彷徨^{ほうこう}

序 章

1

街路を人々が叫びながら走っていた。人の流れが一方向に集中して滞留すると、人の群れは街路から溢れだし、並び建っている師団司令部と旅団司令部の庁舎の前にまで人垣を作った。

「火事だっ」

という鋭い叫び声が続けて聞えた。第四旅団長陸軍少将友田春延は椅子から立上って窓に向けて立った。旅団長の部屋にいた人たちは一斉に立上って、友田少将の背後に、彼等自身の階級のへだたりだけを残して並んだ。

火事は第八師団司令部の庁舎と大通りをへだてて斜め前であつた。民家としては珍しい、煉瓦の四角な煙突から、真赤な炎が立昇っていた。

街路の人々は増えたが、その火事を消そうとする者は少なかった。多くの者が煉瓦の煙突から出る炎が更に威勢よく燃え上ることを期待しているようであつた。

煉瓦の煙突の家の周囲を近隣の人がバケツや桶がきを持って走り廻っていた。それらの緊張した顔と火事を眺めている人々の表情とが対照的に動いていた。

髪をふり乱した女が煉瓦の煙突の家から裸足はだしで街路に走り出して大声で喚き叫んだ。なにを言っているか分らなかった。

煉瓦の煙突の炎が高く燃え上るにつれて、その家の屋根からも煙が上った。

旅団長が振り返って傍の者になにか言おうとした。が、旅団長はなにも言わずにまたもとのところに眼をやった。煉瓦の煙突から出ていた炎が黒煙に変わり、その黒煙が爆発的に噴出した直後、煙突から出る煙の量は急に少なくなり、煙の色も急速に褪あせて行った。

その火事については、間もなく旅団長のところに、菓子工場の単なるボヤであるという報告があった。

巡査が群衆に向って怒鳴っている声がした。煉瓦の煙突から出る煙は更に少なくなつた。

友田少将は窓をはなれてもとの席に戻って坐った。友田少将が席を離れて窓に向っていた時間はおよそ十分ほどだった。よく磨きこまれた会議用のテーブルに窓からさしこむ日が当たっていた。友田少将が坐ると、他の者もそれぞれ、前の場所に坐った。友田少将は、火事についてはなにも言わなかった。旅団長がそれに触れないかぎり、他の者もそのことについて私語を交わすようなことはなかった。

「では始めて貰いましょうか」

友田少将がいうと、その言葉を待っていたように、友田少将と並んで坐っていた第八師団参謀

長中林大佐が立上ってテーブルの上に地図を拡げた。

「日露両国が戦争状態に入った場合、まず考えられることは敵の艦隊が津軽海峡及び陸奥灣を封鎖することである。そうなれば、鐵路及び道路が艦砲射撃によって破壊されることが予想され、青森と弘前、青森と八戸方面との交通は八甲田山系を縦断する道路を利用せざるを得なくなるだろう。夏期はまあなんとかなるだろうが、冬の交通路が設定できるか否かの可能性については今のところ全く不明である。

厳寒、深雪を冒して軍の移動が可能なるや否や、また可能ならしむるためには、如何なる方法を用いるべきかの研究は未だなにもなされていない」

中林大佐は地図を前に置いてしゃべってはいるけれど、それは地図を対象としての作戦を論じているのではなく、一般論を言っていることは明瞭であつた。従つて、彼の指先は、話の当初において、地図の上をたつた一度指しただけであつた。

彼の眼はよく動いた。一人一人に事実を納得させ、いささかの疑問も生じさせないように、そこにいる人々の眼をとらえて離さなかつた。少しでも疑点を持った眼があると、その眼が疑問を解くまで食いついていた。

その会議用テーブルには第四旅団長友田少将、第八師団参謀長中林大佐の他に、第三十一聯隊長児島大佐、同聯隊第一大隊長門間少佐、同大隊第二中隊長徳島大尉、第五聯隊長津村中佐、同聯隊第二大隊長山田少佐、同大隊第五中隊長神田大尉がいた。

第三十一聯隊及び第五聯隊は第四旅団に属し、第四旅団は第八師団に属していた。第八師団長

こそ顔を見せてはいなかったが、師団長の代理ともいうべき、師団参謀長中林大佐が出席しているのだから、この会合は、師団、旅団、聯隊の各首長の会合であり、更にその系列の延長が大隊長、中隊長にまで到って止つているところに異色があった。

「いままでは、日露がもし開戦したならばという仮定のもとに話して来た。しかれば、その蓋然性は如何と問われるならば日露開戦は既に仮定の段階を出でて、いまは、開戦の時期が速いか遅いかの問題になつていと言わざるを得ない状態である。軍は、日露開戦準備にあらゆる努力を傾倒している。兵器の充実然り、兵の教育然りである。ただ、現在、わが陸軍に取つて一つだけ明らかに準備不足と考えられるものがある。寒地装備であり、寒地教育である。シベリアの寒さを毫もいとわぬ装備を持ち、酷寒零下数十度においても尚かつ戦うことができる露軍に拮抗するには、わが軍も、露軍と同等以上の装備が必要である。ところが、残念ながらそれに対する、研究も、実験もはなはだ少ない。雪中行軍を例にとつて見ても、弘前第三十一聯隊が今年の一月に行なつた、岩木山登山行ぐらいのものである。この岩木山雪中行軍は軍に取つて偉大なる収穫であつた。しかし、この実験行軍は、あまりに短期間であり、そして、旅程も短く、天候に恵まれ過ぎていたがために、研究材料としてはいささか不足の感があつた。第八師団参謀長として勝手なことを言わせて貰うならば、中隊又は小隊の編成を持つて厳寒積雪の八甲田山踏破の可能性を試して欲しいということである。これは師団命令ではない。飽くまでも、師団参謀長としての希望である。命令の段階に至るまでの参謀長の私案だと思つて貰つてもいい。厳寒期の八甲田山をいかなる犠牲を払つても踏破せよというのではない。寒さとは如何なるものか、雪とは何物な

のか、その真実の姿を、提示して貰えればいいのである」

中林大佐はそこで言葉を切つて、友田少将の顔を見た。補足することがあればどうぞという顔であつた。

「八甲田山は、青森と弘前の中間にある、青森の歩兵第五聯隊にしても、弘前の歩兵第三十一聯隊にしても、雪中行軍をやるとすれば、まことに手頃の山である」

友田少将は二人の聯隊長に向つて嚴肅な面持で言つてから、突然末席に坐つてゐる徳島大尉と神田大尉の方に向き直り、やや語氣をやわらげて言つた。

「徳島大尉も、神田大尉も雪中行軍についてはなかなかの權威者だそうだな」

聯隊長と大隊長を飛び越えて、旅団長からの直接の言葉であつたから、徳島大尉と神田大尉は椅子をうしろにはねとばすような勢いで立上ると、まず徳島大尉が、

「はっ、雪のことも、寒さのことも知つてゐるといえるほど詳しくは知りません、權威などとはとんでもないことであります」

と答え、続いて神田大尉は、

「平地における雪中行軍はやつたことがございますが、山岳雪中行軍の経験はございません」と答えた。

「冬の八甲田山を歩いて見たいと思わないかな」

旅団長友田少将が二人に向けたその再度の質問はいささか、度を外れたものであつた。だいたゝ、旅団長が、聯隊長、大隊長をさし置いて中隊長に話しかけたのが異例だったのに、八甲田山

を歩いて見たいかと問うたのは、旅団長自らが、二人の大尉に直接命令したのも同然であった。「はっ、歩いて見たいと思います」

二人は同時に答えた。答えた瞬間、二人はその責任の重大さに硬直した。

徳島大尉も、神田大尉も、ここへ来るまでに、大隊長及び聯隊長を通して、おおよそのことは聞いていた。雪中行軍という大きな問題が与えられることになるだろうとは思っていた。それは軍人としてまことに名誉なことであったが、直々旅団長から、やって見たいかと問われようとは思っても見ないことであつた。

「やる気があることはよろしい。だがやる気だけではいけない、準備が大事だぞ。ありとあらゆる方法を慎重に考えた上でその行軍を成功させることだ、弘前歩兵第三十一聯隊は三十一聯隊らしく、青森歩兵第五聯隊は五聯隊らしくそれぞれやって見るがいい」

中林大佐が二人に向つて言つた。それぞれやつて見るがいいということには、重要な意味が含まれているようだった。競争せよとは言わないが、それぞれの聯隊で秘策を尽して当つて見ろと言わぬばかりであつた。

会議はそれで終つた。

師団參謀長と旅団長をそこに残して、六人の将校は、第四旅団の庁舎を出た。街路に溢れていた人の群れもいなくなり、そこにあれほどの騒ぎがあつたのは嘘のようであつた。

六人は階級の順に二列縦隊に並んで街路を歩いた。聯隊長、大隊長、中隊長とそれぞれ二人ずついて、同じ方向に行くとすれば、二列縦隊にならざるを得なかつた。

第三十一聯隊長の児島大佐は肩を並べて歩いている津村中佐に話しかけた。

「やるとすれば、来年の一月の末か二月の初めということになるな」

「さよう、今から準備にかかるのと丁度そのころになるだろうし、厳寒、積雪期と言え、やはり、一月の終りから二月の初めにかけてですな」

津村中佐が応じた。

「どうでしょう、もともと研究的雪中行軍だから、弘前と青森の双方から出発して、八甲田山あたりで擦れ違ふということにしたら」

児島大佐が言った。そのとき彼の足がちょっと止った。あとに続く四人の足が止り、いまそこで取り決めがなされようとしている、重大なことに聞き耳を立てた。

「よろしいですな、それでは双方出発期日については打合せて決めることにいたしましょう。つまり、自然条件は同じということですな」

「そうだ、自然の条件は同じにして、編成についてはそれぞれの立場で考慮すればいい」

児島大佐は、そこでひとつ軽い咳払いをした。通行人が近よって来たからだ。児島大佐のあとに続いている大隊長の門間少佐は、聯隊長同士の会話に少々こだわるものがあった。彼は左側を歩いている山田少佐に、なにかひとこと話して見たかった。大隊長として全く同じ立場にいる山田少佐が、いまの聯隊長たちの話をどう感じたか確かめて見たかった。彼はいくらか歩調を落して、山田少佐の耳元で囁くような声で言った。

「実施となるとお互いにたいへんですな」

前に行く聯隊長には聞えない程度の低い声だった。

「たいへん？ なにがです、少しもたいへんなことなぞないではないですか」

山田少佐は光る眼で門間少佐を見返して言った。その一言で門間少佐は話の継ぎ穂を失った。門間少佐は興ざめた顔で、前に行く聯隊長の後を追った。

「ほんとうにたいへんなのはわれわれですな」

と徳島大尉が神田大尉に言った。

「そうです。これは誠にたいへんなことになるかもしれませんが、三十一聯隊の方は、岩木山の経験があるけれど、五聯隊には今度が全くの初めてですから……」

神田大尉が言った。

「いや、天候に恵まれた、たった一度ぐらいの経験なんかなんの役にも立ちませんよ」

そこで徳島大尉は無意識に神田大尉と歩調を合わせてから言った。

「寒くなりましたな」

「もう十一月の末ですから」

二人は同時に空を見上げた。

2

神田大尉が弘前の徳島大尉の官舎を訪問したのは十二月に入ってから最初の日曜日であった。神

田大尉は平服だった。手紙で連絡してあったので徳島大尉は玄関に出て神田大尉を迎えた。神田大尉は青森から土産物として持参して来た清酒二升を徳島大尉の前に置いた。

「あなた以外には教えを乞う人がありませんのでね」

神田大尉は初めっから下手に出ていた。まず、今年の一月の岩木山雪中行軍の準備段階について訊いた。

「特にこれと言って申し上げることはありませんが、雪が深いために道が見えなくなりそうですので、事前に地元民をやつて、要所要所に、目印の棒を立てたり、立木の枝に赤い布切れを結びつけて置きました。これが非常に役立ちました。天氣がよくても雪道は不安なものです。だから吹雪にでもなつたら布切れぐらいではどうしようもないでしょうね」

徳島大尉は磊落な男であつた。同じ軍に秘密はあつてはならない、まして三十一聯隊と五聯隊は同じ旅団に属しているのだから、来たるべき八甲田山越えの雪中行軍には共に成功しなければならぬと考えていた。

「地図が使えないということも充分承知して置かないといけません。地図上の目標物が把握できにくくなるのです、やはり雪中行軍には原則として案内人が必要ではないでしょうか」

「原則として？」

神田大尉は反問した。

「そう、原則としてです。地図は万能ではありません、地図以上のものと言つたら人間です。土地の案内人を有効に使つたほうがいいに決っています」

徳島大尉は、さらに細部の点について、案内人の必要性を説いた。

「雪中の露営は可能でしょうか」

神田大尉はこの点が最も訊きたいところであつた。

「積雪の程度と天候の如何によりますが、まず、現在の軍の装備では深雪の中の露営は困難ですな、特に八甲田山に踏みこんだ場合、露営をすることは死を意味するようなものです。如何なる方法をもつてしても、あの寒気に勝つことはできません」

あの寒気と徳島大尉が言つたとき、彼は一月の岩木山登山の折のことを思い出しているようであつた。

「それから履き物ですが、これは地元民の履く雪沓ゆきくつが一番いいようですね、雪沓の予備を用意して置いて適当な折に履きかえるようにするといいでしよう、飯は石のように凍つて食べられませんから、食べるときはどうしても火が必要です」

徳島大尉は酒を出して神田大尉をもてなした。神田大尉の訪問が私的なものであつたので、話は雪中行軍だけに限定されずに、思わぬ方向にそれて行くことがあつた。日清戦争の話になると、二人は顔を赤くして語り合つた。しかし、神田大尉の訪問が八甲田山雪中行軍の下準備のための来訪であるかぎり、勝手放題のことをしゃべって、熱を上げているわけには行かなかつた。話はすぐまた雪や氷や装備などのことに戻り、二人は額を寄せるようにして話しこんだ。

「外国の軍隊の雪中行軍の装備についてなにか資料はありませんか」

神田大尉が訊いた。

「自分もそれについて旅団の方に訊いて見ましたが、これと言ってしっかりしたものはないらしい、せいぜい防寒具として毛皮や羅紗^{ウツシヤ}服などの類を用いることぐらいしか分つてはいないようです。雪の上で履くスキーというものがあるらしいが、わが軍ではまだそれを使って見るつもりはないようですな。外国の軍隊の防寒装備についての文献なら多少師団の方にあるから、行つて見られたらどうでしょうか」

徳島大尉がそうすすめると、神田大尉は、

「いや、自分は教導団出ですので、外国語の方は全然だめなんです」

と言つた。当時士官になる道は二つあつた。士官学校に進む道と、下士官になるべき道を進んで行つて、士官に進級する場合であつた。神田大尉は後者の道を選んだ。彼は明治元年秋田県の漁村に生れた。十九歳のとき陸軍教導団に入団し、二十一歳で軍曹になり、累進して、二十八歳のときに少尉に任官した。大尉になったのは、明治三十四年五月であつた。たまたま日清戦争によつて軍備が拡張されたこともあつたが教導団を出てここまで進級したのは、神田文吉自身が勝れた才能の持ち主であつたからである。

当時の将校の履歴を見るとほとんどが士族又は華族出身であり、平民で将校になれたものは非常に珍しかった。そのころはまだ封建時代の考え方がかなりはつきりと残つていた。士族の子弟でなければ士官学校に入ることは容易でなかつたから、どうしても軍人になりたいものは神田大尉のように教導団を経て行つたのである。そして、そういう道を通つた平民出の将校に優秀な人が次々と現われたのである。神田大尉もその一人であつた。神田大尉が教導団を出たと徳島大尉